

# 社会教育施設と連携した社会科教育実践についての一考察

## ―体験的な活動や表現活動の充実に向けて―

義務教育研修課 指導主事 木村 明宏

### はじめに

平成 20 年に告示された小学校学習指導要領<sup>1)</sup>（以下、「新しい小学校学習指導要領」という）において、社会科には、児童の主体的な学習を重視した取組の継続とさらなる充実が求められている。この点について、小学校学習指導要領解説（社会編）には、「社会科の授業においては、これまでと同様に、社会の変化に自ら対応する能力や態度の育成を図る観点から、学び方や調べ方を大切に児童の主体的な学習を一層重視することが必要である」<sup>2)</sup>と示されている。

児童が主体的な学びを形成していくための一つの手段として、「地域の実態を生かし、児童が興味・関心をもって学習に取り組めるようにするとともに、観察や調査・見学などの体験的な活動やそれに基づく表現活動の一層の充実を図ること」<sup>3)</sup>が考えられる。そのためには、地域にある素材を教材化すること、地域に学習活動の場を設けること、地域の人材を積極的に活用することなどに配慮した指導計画を作成することが必要となる。以上の点を踏まえ、地域に密着した学習・情報拠点としての機能が充実した社会教育施設を活用することが、児童の知的好奇心を高め、学習への動機付けや学習の深化を図ることに繋がる有効な手段であるといえる。

本研究では、当所の「社会科教育実践研修講座」で実施した社会教育施設や学芸員等の有効な活用の方策についての研修成果をとおして、体験的な活動とそれに基づく表現活動を充実させる授業の在り方について考察する。

## 1 地域の実態を生かした社会科教育について

### (1) 児童の興味・関心を高めるために

「新しい小学校学習指導要領」では、総則において、「児童に生きる力をはぐくむことを目指し、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かす教育の充実に努めなければならない」<sup>4)</sup>と示し、児童の自主的、自発的な学習を促進することの大切さを述べている。そうした学習を促進するには、体験的な学習や基礎的・基本的な知識及び技能を活用した問題解決的な学習を重視するとともに、児童の興味・関心を生かした学習計画を作成することが望まれる。そして、地域の実態を生かした社会科の学習について小学校学習指導要領解説（社会編）には、地域にある歴史博物館や郷土資料館などの多様な施設を社会科の学習に積極的に活用することによって、「児童の知的好奇心を高め、学習への動機付けや学習の深化を図ることができる」<sup>5)</sup>と示されており、地域の素材を教材化することは、児童の学習への興味・関心を高め、学習問題への取組を自主的、自発的なものとする基礎となると考えられる。

### (2) 地域の素材の教材化に向けて

社会科における教材の役割とは、「子供一人一人が自ら社会的なものの見方や考え方をくり上げていくことにある」<sup>6)</sup>とされている。教材とは、教師の意図している学習指導の内容と児童生徒の学習活動を結び付ける材料であり、素材をそのまま児童生徒に提示しても十分な学習効果は期待できない。社会科においては、教師の意図と児童生徒の実態等を踏まえて、社会的な事象を教材化する必要がある。

社会科の学習に活用できる地域の素材には、地域の自然や文化、人々の生活の様子といった社会的な事象があり、その中には、地域の博物館や郷土資料館等の施設の活用も含まれる。こうした地域の素材を教材化するには、教員が学習指導の構想や授業のねらいを明確にし、それに適した地域の素材についての情

報を集めるなど、最適な素材を選択することが重要となる。素材の選択に当たっては、児童生徒に興味・関心を抱かせる教材となるか、児童生徒が見通しをもって自分たちの力で解決できる学習問題が含まれた教材となるか、体験的な学習活動に適した教材となるか、地域社会によりよいかかわっていかうとする態度を養う教材となるかなどを考慮して、指導計画に位置付けていくことが大切である。また、地域の人材についても同様であり、公共施設で働く人たちや地域に暮らす人たちなどの話を子どもたちにそのまま伝えても、期待する学習効果が得られるとは限らない。授業のねらいに迫るための教材として、学習過程でどのように児童生徒に与えるのが効果的かを十分に検討する必要がある。地域の素材も地域の人材も、授業で活用するためには、教材化することが大切なのである。

地域の素材の中でも、博物館や郷土資料館といった社会教育施設では、多様な体験活動や学習への支援が準備されている。また、研究成果を学校教育で活用するために、学習プログラムの開発や、教員向けの研修など学校教育を支援するためのしくみが整えられており、学芸員やボランティアなどによる学習支援も期待できるため、教材化しやすい地域の素材の一つといえる。こうした社会教育施設を授業に活用することで、自らすすんで見たり、聞いたり、調べたりする体験的な活動が充実し、児童生徒が主体的に学習することが可能になるのではないかとと思われる。

社会教育施設の活用については、平成元年改訂の小学校学習指導要領において、「博物館や郷土資料館等の活用を図るとともに、身近な地域及び国土の遺跡や文化財などの観察や調査」<sup>7)</sup>を行うよう配慮することが示された。これは、それ以降に改訂された小学校学習指導要領においても引き継がれており、地域の博物館や郷土資料館などの見学や調査をとおして具体的に学習することで、児童に社会的な事象を理解させたり生活に根ざした伝統や文化への興味・関心を高めたりすることが求められている。児童生徒の学習への興味・関心を高め、学習問題への取組を主体的なものとするためには、実物や本物に触れることができる地域の社会教育施設を活用することが効果的であると考ええる。

## 2 社会科教育の充実に向けた社会教育施設との望ましい連携

### (1) 学校と社会教育施設との連携の方策

近年、国や地方公共団体、企業等によって博物館やその他の施設の整備が進められており、社会教育施設は、参加体験型の展示をはじめとした体験的な活動などの学校で活用しやすいプログラムや教材を開発し、施設の特色を生かした事業を展開している。

実際に学校が社会教育施設と連携した授業を行う場合、小学校では、学習内容との関係などから校外学習に組み入れることが多く、実施できる時期が限定されてしまう傾向にある。また、中学校では、他の教科との関係からま

とまった時間を校外学習に費やすことが難しい場合もあると思われる。こうした状況を踏まえ、限られた学習の機会を効果的なものにするためには、授業のねらいを明確にし、学校と社会教育施設が学習内容につい

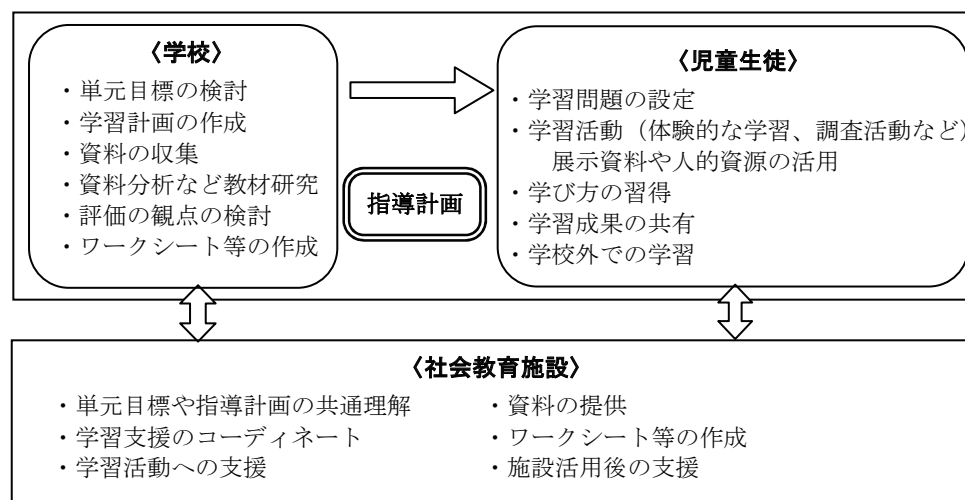


図1 指導計画の作成時に考慮したい諸要素例とその関連

て細部にわたる相談を進める必要がある。加えて、図 1 のような要素を念頭にアレンジを加えて、指導計画を効率的に作成することが大切である。

指導計画の作成に当たっては、教員が社会教育施設の内容、展示資料、学習への具体的な支援内容などを把握しておく必要があり、また、教員が社会教育施設職員と授業の目的について十分な共通理解を図ったうえで教材研究を行うことが大切である。それが学校と社会教育施設の連携の第一歩となるのである。そして、教材研究の過程で社会教育施設職員の専門性を引き出し、児童生徒にとって効果的な教材として、また支援者として授業にかかわることができる指導計画を工夫していくことが望まれる。

## (2) 当所と県立考古博物館との連携

当所では、小・中学校及び特別支援学校（小・中学部）で社会科を担当する教員を対象として、「社会科教育実践研修講座」を実施した。

同研修講座は、県立考古博物館において学校と社会教育施設との連携の方策を研修した後、各地域の社会教育施設等を活用した授業プランを実践することをとおして、教員の実践的指導力の向上を図ることを目的とした。表 1 に示すのは、同研修講座の概要である。

ここでは、同館で実施した第 1 回研修講座をとおして、学校と社会教育施設との望ましい連携の方策について考えたい。

表 1 「社会科教育実践研修講座」の概要

| 第 1 回研修講座 会場：県立考古博物館 |                                                                       |
|----------------------|-----------------------------------------------------------------------|
| 講義                   | 社会教育施設活用の視点 ―「もの」と「ひと」の活用―<br>・県立考古博物館の概要と連携の方策                       |
| 演習                   | 体験的な活動を取り入れた授業プランづくりに向けて<br>・館内展示の見学、教材化に向けた質疑応答<br>・「考古楽者」による学習支援の体験 |
| 演習                   | 体験的な活動を取り入れた授業プランづくり I<br>―県立考古博物館を活用して―<br>・授業プランの作成と相互評価            |
| 各校での実践               | ・地域の社会教育施設等の教材化<br>・地域の社会教育施設等との具体的な連携<br>・地域の社会教育施設等を活用した授業プランの素案づくり |
| 第 2 回研修講座 会場：県立教育研修所 |                                                                       |
| 演習・協議                | 体験的な活動を取り入れた授業プランづくり II<br>―地域素材を活用して―                                |
| 協議                   | 授業プランの相互評価                                                            |
| 講義                   | 児童生徒の主体的で探究的な学びのために<br>―体験的な活動を取り入れた社会科指導について―                        |
| 各校での実践               | ・地域の社会教育施設等を活用した授業プランの実践<br>・実践記録のまとめ                                 |

表 2 県立考古博物館が提供する主な学習プログラム<sup>8)</sup>

|                                                                                                        |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| (1) 展示室を使った学習プログラム                                                                                     |
| ①展示案内(60 分) ②課題解決自由見学(60 分)<br>③壁新聞作成のための調べ活動(60 分)                                                    |
| (2) 古代体験学習プログラム                                                                                        |
| ④まが玉づくり(60 分) ⑤ミニミニ石包丁づくり(60 分)<br>⑥火おこし体験(30 分) ⑦土器パズル(30 分)<br>⑧古代組みひも(30 分)                         |
| (3) 学芸員による講座プログラム                                                                                      |
| ⑨学芸員によるミニ講座(15 分～50 分)<br>土器のおはなし、竪穴住居はこんな家、弥生人は何を食べていたのか、古墳の始まりと大きさ、古代の船って、どんな船？、むかしの塩づくり、須恵器のおはなし など |
| (4) 遺跡公園を使った学習プログラム                                                                                    |
| ⑩大中遺跡案内(30 分) ⑪どんぐりであそぼう(90 分)<br>⑫大中遺跡であそぼう(60 分)                                                     |

第 1 回研修講座では、受講者は、まず学校が社会教育施設等と有効に連携していく方策について講義を受けた。その後、学芸員との質疑応答をまじえながら、展示資料の見学やボランティアによる学習支援を体験した。このように、受講者は具体的な学習支援を体験することにより、同館の提供する体験的な活動についての理解を深めた。そして、実際に同館を活用した授業プランを作成するという研修内容とした。

同館では、表 2 に示すように、多様な学習プログラムを用意している。これらのプログラムは、テーマ展示や特別展示を活用した調べ学習や、まが玉、石包丁をつくるといった

体験的な活動が中心となっている。テーマ展示室、体験展示室、特別展示室では、資料を観察する、調べる、学芸員に質問する、体験するなどの多様な学習活動の展開が可能である。また、古代体験学習のプログラムは、児童生徒が実際に体験することで、疑問を発見したり、興味・関心を抱いたり、学習問題を解決したりといった実感をともなう学習を支援するものとなっている。また、このような体験的な活動の実施に当たっては、学芸員はもちろんのこと、「考古楽者（こうこがくしゃ）」と呼ばれるボランティア



図2 「考古楽者」の学習支援を体験する教員

ィアが、児童生徒への学習支援を行っている。「考古楽者」は、考古学に関する基礎的な知識を有し、地域における歴史文化遺産保護活用のリーダーとして活動できる人材として同館が育成しており、体験的な活動などの実施に携わっている。

表3は、同館の提供する体験的な活動を中心とした学習プログラムを生かして、単元や授業のねらいに迫るために、どのように体験的な活動を位置付けるかを意識して、受講者が班別に作成した授業プランの概略である。

表3 県立考古博物館を活用した体験的な活動を取り入れた授業プランの概略

|                         |      | A 班                                                               | B 班                                                                                                                                | C 班                                                                                                                                         |
|-------------------------|------|-------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 対象学年                    |      | 小学校3年生                                                            | 小学校6年生                                                                                                                             | 中学校1年生                                                                                                                                      |
| 単元名                     |      | 「人々のくらしの移りかわり」                                                    | 「米づくりと人々のくらし」                                                                                                                      | 歴史的分野 「弥生時代」                                                                                                                                |
| 学習過程<br>(○は中心となる体験的な活動) | つかむ  | ○火おこし体験、炊飯体験<br>(ボランティアの支援)                                       | ・館内展示の見学<br>米づくりのむらの様子                                                                                                             | ・縄文時代と弥生時代の違いの振り返り<br>稲作、鉄器(金属器)、高床倉庫など<br>館内展示の活用                                                                                          |
|                         | 解決する | ○調査活動<br>館内展示、実物資料の活用<br>(学芸員・ボランティアの支援)<br>・学芸員による説明<br>(学芸員の支援) | ・課題別グループ学習<br>生活について<br>交通について<br>争いについて<br>墓について<br>○調査活動<br>館内展示、実物資料の活用<br>(学芸員・ボランティアの支援)<br>○まが玉や石包丁づくり、火おこし体験<br>(ボランティアの支援) | ・課題別グループ学習<br>銅鐸について<br>土器について<br>人々の仕事について<br>○調査活動<br>館内展示、実物資料<br>情報プラザの活用<br>(ボランティアの支援)<br>○古代の道具づくり<br>学校への出前授業の活用<br>(学芸員・ボランティアの支援) |
|                         | まとめる | ○学習のまとめと情報の発信<br>劇、進化すごろく、新聞づくりなど                                 | ○学習のまとめと情報の発信<br>新聞づくり                                                                                                             | ○学習のまとめと情報の発信<br>ポスターセッション                                                                                                                  |

いずれの班の授業プランも、児童生徒が主体的に学習に取り組むために、興味・関心を高め学習意欲を持続することや興味・関心に応じた学習の展開を重視した授業プランとなっている。

A班では学習問題をつかむ過程での体験的な活動をとおして、電気やガスのなかった昔の暮らしの大変さを実感させ、これからの学習への意欲を高めることをねらっている。しかし、それだけにとどまらず、学習問題を解決していく過程における体験的な活動として館内展示を活用した調査活動を計画し、学習意



欲を持続させながら、学習のまとめと情報発信においての体験的な活動の充実をねらった展開を計画している。

B、C班は、児童生徒の興味・関心に応じた調査活動や古代の道具づくりの活動を計画しており、学習問題を解決していく過程における体験的な活動を授業プランの中心に位置付けている。それぞれの班が作成した授業プランは、児童生徒の興味・関心に応じた複数の学習展開を用意することによって、児童生徒にとって主体的に学習を進めやすい授業プランとなっている。児童生徒が主体的に学習を進めていくためには、それにかかわる指導者の人数を増やして児童生徒の体験的な活動を充実させる必要が生じてくるが、学芸員やボランティアの支援を活用することで指導者が手薄になるという問題を解消している。

上記のように、体験的な活動を授業プランに適切に位置付け、児童生徒の興味・関心を高めたり、興味・関心に応じた学習展開を工夫したりすることが、児童生徒が学習意欲を持続して主体的に学習問題を解決していくことに繋がっていくのではないかと考える。

### 3 地域の社会教育施設を活用した社会科教育の実践

前章では、県立考古博物館を具体例として、社会教育施設の活用をとおして体験的な活動を充実させる授業の在り方について考えてきた。県下には、兵庫県博物館協会に加盟している施設が公立・私立あわせて141あり、これら以外にも多数の社会教育施設が各地域で特色ある事業を展開している。こうした各地域の社会教育施設を授業で活用し、「地域の実態を生かし、児童が興味・関心をもって学習に取り組めるようにするとともに、観察や調査・見学などの体験的な活動やそれに基づく表現活動の一層の充実を図る」<sup>9)</sup>ためには、次の3点が大切であると考ええる。

第1に、地域の素材を教材化し、地域の施設を積極的に活用したり地域の人々と直接かかわって学んだりする学習活動を指導計画に位置付けることで、児童が興味・関心をもって学習に取り組めるようにすることである。第2に、児童が実物や本物を直接見たり触れたりすることをとおして社会的事象を適切に把握し、具体的、実感的にとらえることができるようにし、観察や調査・見学などの体験的な活動を充実させることである。そして第3に、観察や調査・見学、体験などによって分かったことや考えたことなどを適切に表現する活動を指導計画に効果的に位置付け、調べたことや考えたことを表現する力を育てることである。

ここでは、以上の3つの視点から、「社会科教育実践研修講座」の受講者が実践した授業プランと実践校における授業研究記録をとおして、体験的な活動とそれに基づく表現活動を充実させる授業の在り方について考察する。

#### (1) 地域の社会教育施設等を活用した授業実践

ここに資料1として示す授業プランは、「社会科教育実践研修講座」の受講者が作成したものの一部で、第2回の研修講座での相互評価をとおして改善されたものである。あわせて、資料2として実践校における授業研究会記録の一部を示す。

#### 資料1 地域の社会教育施設等を活用した授業プラン（抜粋）

1 学年（分野） 6年 歴史

2 単 元 名 発信！赤穂の歴史、そして今・・・

3 単 元 目 標

赤穂の歴史上の主な事象について、人物の働きや代表的な文化遺産を中心に遺跡や文化財、資料などを活用して調べ、歴史を学ぶ意味を考えるとともに、自分たちの生活の歴史的背景、赤穂の歴史や先人の働きについて理解と関心を深める。

4 単元学習計画（全20時間）

| 時間                       | 主 な 学 習 活 動                                                                                                                    | 学習形態                                                       | ○支援・◆評価・評価資料                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
|--------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 第一次<br>つかむ<br>(3時間)      | <p>○赤穂に残る歴史について考え、調べたいことを見付けよう。</p> <p>・塩づくりの歴史<br/>・義士の歴史<br/>・赤穂城や城下町の歴史</p>                                                 | <div>一 斉</div> <div>一 斉</div> <div>↓</div> <div>グループ</div> | <p>○今までの社会科や総合的な学習の時間に学習した赤穂市の特徴を話し合わせることによって、他の地域にはないものに視点を向ける手助けとする。</p> <p>○赤穂市立歴史博物館を見学することで、赤穂の歴史を調べようという意欲を高めるとともに、問題意識をもって調査活動に取り組むための糸口とする。</p> <p>○項目別グループになることで、それぞれの興味・関心を生かした調査活動になるように配慮する。</p> <p>◆自分の調べたい赤穂の歴史について、問題意識をもつことができる。(関心・意欲・態度)</p> <p>評価資料 &lt;ワークシート・行動観察&gt;</p>                                                                                                                                                                                       |
| 第二次<br>見通す・解決する<br>(6時間) | <p>○赤穂に残る歴史について調べよう。</p> <p>・本での調査<br/>・インターネット<br/>・フィールドワーク<br/>・インタビュー</p>                                                  | <div>グループ</div> <div>↓</div> <div>個 人</div>                | <p>○ワークシートを用意することにより、一人一人が見通しをもって活動できるようにする。</p> <p>○人との交流のマナーを事前に確認しておき、フィールドワークやゲストティーチャーを招いての調査活動に自信をもって取り組めるようにする。</p> <p>◆発信するための資料収集を取捨選択しながら行うことができる。(観察・資料活用)の技能)</p> <p>評価資料 &lt;ワークシート・インターネット調査の内容・フィールドワーク、インタビューでの行動観察等&gt;</p> <p>◆調査活動の中で多くの人に接して交流を深め、人の思いや考え方を知ることができる。(知識・理解)</p> <p>評価資料 &lt;ワークシート・フィールドワーク、インタビューの内容&gt;</p>                                                                                                                                    |
| 第三次<br>まとめる<br>(6時間)     | <p>○ポスターをつかって調べたことを発表しよう。</p> <p>↓</p> <p>・ポスターにまとめる</p> <p>↓</p> <p>・ポスターセッション</p> <p>↓</p> <p>・赤穂の歴史について話し合う</p>             | <div>グループ</div> <div>↓ ↑</div> <div>個 人</div>              | <p>○国語科での既習の内容を想起させ、大見出しや小見出しの付け方、レイアウトの方法などを確認することによって、聞き手を意識したポスターづくりに取り組めるようにする。</p> <p>◆調べた情報を取捨選択して伝えたい内容を効果的に表現することができる。(観察・資料活用)の技能)</p> <p>評価資料 &lt;ワークシート・ポスター・ポスターセッション・行動観察&gt;</p> <p>○ポスターセッション形式で情報交換を行うことにより、自分の意図が聞き手に伝わるように話の組立てを工夫したり、話し手の意図を考えながら話を聞いたりすることができるようにする。</p> <p>◆話し手は伝えたいことを的確に話そうとし、聞き手は話し手の意図をつかみながら聞こうとしている。(関心・意欲・態度)</p> <p>評価資料 &lt;行動観察&gt;</p> <p>◆歴史的な遺産は、その時代の人々の苦労や願い、技術力によって支えられ、残されてきたことが理解できている。(知識・理解)</p> <p>評価資料 &lt;ワークシート&gt;</p> |
| 第四次<br>まとめる<br>(5時間)     | <p>○赤穂に生きる人の願いを調べよう。</p> <p>・製塩工場<br/>・市役所都市計画課<br/>・市役所観光課</p> <p>↓</p> <p>○赤穂のまちづくりについて考えよう。</p> <p>・赤穂の近未来<br/>・そこで自分は…</p> | <div>グループ</div> <div>↓</div> <div>個 人</div>                | <p>○訪問先に話の内容を依頼しておくことで、赤穂に生きる人の願いを考える助けとする。</p> <p>◆歴史はそれを支えた地盤があり多くの人々の願いにより、今も赤穂の人々の生活に息づいていることを知ることができる。(知識・理解)</p> <p>評価資料 &lt;ワークシート・ポスター&gt;</p> <p>◆赤穂のまちづくりについて自分の考えをもち、これからの赤穂について考えることができる。(思考・判断・表現)</p> <p>評価資料 &lt;ワークシート・ポスター・行動観察&gt;</p>                                                                                                                                                                                                                             |

## 5 評価の観点

|                 |                                                                                                                                                                                                                        |
|-----------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 社会的事象への関心・意欲・態度 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の調べたい赤穂の歴史について、問題意識をもつことができる。</li> <li>・発表会の際、話し手は伝えたいことを的確に話しそうとし、聞き手は話し手の意図をつかみながら聞こうとしている。</li> </ul>                                                                     |
| 社会的な思考・判断・表現    | <ul style="list-style-type: none"> <li>・赤穂のまちづくりについて自分の考えをもち、これからの赤穂について考えることができる。</li> </ul>                                                                                                                          |
| 観察・資料活用の技能      | <ul style="list-style-type: none"> <li>・発信するための資料収集を取捨選択しながら行うことができる。</li> <li>・調べた情報を取捨選択して伝えたい内容を効果的に表現することができる。</li> </ul>                                                                                          |
| 社会的事象についての知識・理解 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・調査活動で多くの人に接して交流を深め、人の思いや考え方を知ることができる。</li> <li>・歴史的な遺産は、その時代の人々の苦労や願い、技術力によって支えられ、残されてきたことが理解できる。</li> <li>・歴史はそれを支えた地盤があり多くの人々の願いにより、今も赤穂の人々の生活に息づいていることを知ることができる。</li> </ul> |

## 6 活用したい地域の素材、人材

|          |                                                                                                      |
|----------|------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活用したい素材  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・赤穂市立歴史博物館 ・赤穂城 ・城下町 ・製塩工場</li> <li>・市役所都市計画課及び観光課</li> </ul> |
| 活用したい人材  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・学芸員 ・郷土の歴史家 ・製塩工場の社員 ・市役所都市計画課及び観光課職員</li> </ul>             |
| 期待する学習効果 | <p>ふるさと赤穂の発展に大きな働きをした先人の業績や優れた文化遺産について興味・関心を高め、理解を深めるとともに、赤穂の歴史や伝統を大切にし、郷土を愛する心情を育てることが期待できる。</p>    |

## 資料2 授業研究会記録（抜粋）

### ○ 児童のアンケートから

| ア ン ケ ー ト 項 目                                        | できた | もうひといき |
|------------------------------------------------------|-----|--------|
| 自分で調べたい問題を見付けられるようになりましたか。                           | 85% | 15%    |
| インタビュー（質問）をすることに自信が付きましたか。                           | 82% | 18%    |
| いろんな調べ方（インタビュー、その場所へ行って調べる、資料で調べるなど）をすることが楽しくなりましたか。 | 96% | 4%     |
| 大見出しや小見出しに気を付けて、まとめることが楽しくなりましたか。                    | 92% | 8%     |
| 自分の伝えたいことを発表することに自信が付きましたか。                          | 82% | 18%    |

### ○ まとめ

#### (1) 成果

- ・本校では、体験に根ざした問題解決的な学習が必要であると考え、体験的な学習を積極的に組み入れてきた。単元構想を組む際には、体験活動の位置付けとねらいを明確にしてきた。そのことにより、子ども自らが意欲をもって主体的に問題を見付け、自分とのかかわりの中で問題を解決したり、身に付けた力を生きて働く力にしたりすることができた。
- ・児童一人一人に「確かな学び」を育むには、毎時間、評価の観点をもつことの必要性があることに気付き、作成するワークシートの一枚にもその観点を盛り込んだり、「振り返り」の観点を共有化できるような指導を心がけたりするようになった。
- ・地域をテーマに単元を組み、地域の人材の教育力を積極的に活用したことにより、学習に具体が登場し、理解が深まった。挨拶ができるとか、丁寧にものをたずねたりできるなどといった、人に対する基本的な態度が身に付き、地域の人々や自分の住む地域に親しみの気持ちをもつこともできた。また、地域や施設との継続したかかわりにより、教員と地域や施設の方が、ともによりよい「社会科」にするための考えを練り合える関係が成立している。

## (2) 課題

- ・一人一人の子どもの学習の跡や成長の状況がとらえられるように、学校全体として個に応じた指導方法の研究を行い、実態や指導の場面に応じて効果的な方法（チーム・ティーチング、グループ学習、個別学習など）を柔軟かつ多様に導入できるよう一層努力する。
- ・公民館、図書館、博物館、社会教育関係団体等との連携・協力や、地域の施設や経験豊かな人材など多様な教育資源を把握し、教員の学年担当が代わっても継続的に活用できるしくみを確立していくことが一層必要である。

## (2) 授業実践についての考察

### ア 地域の素材の教材化と人材の活用

この授業プランが実践された小学校がある赤穂市は、“忠臣蔵のふるさと”や“塩のまち”として知られ、児童が身近に「歴史」を感じることができる地域であり、史跡に触れる体験も多いと思われる。こうした地域の実態を生かして、本単元の冒頭で、赤穂市立歴史博物館の見学を取り入れることで、児童の「赤穂に今も残る歴史について考え、調べたいことを見付けたい」という学習意欲を高めたり歴史についての興味・関心を喚起したりすることができると考えられる。例えば、昔の城下町と今の城下町との比較の中で、児童は「昔のまちづくりが、今のまちづくりに生かされている」ことに気付いており、その理由として「今の川の流れが、当時の人が造ったものである」ことをあげている。このような発見が、児童の興味・関心を高め、「赤穂の歴史をもっと知ろう」という学習意欲に繋がっている。

また、単元学習計画には、赤穂市立歴史博物館だけでなく、赤穂城や城下町、製塩工場、市役所での見学や調査といった児童にとって身近な地域でのフィールドワークを積極的に取り入れ、地域に学習活動の場を設けている。こうした学習活動により、児童は身近に存在しているなじみ深い地域の素材に対して、社会科の学習という視点からそれらを新たに見つめ直す機会となるのである。

地域の人材についても、同じことがいえる。活用したい人材として示されている学芸員、郷土の歴史家、製塩工場の社員、市役所都市計画課及び観光課職員は、児童にとって身近な存在の人たちである。こうした人たちがゲストティーチャーとして社会科の学習に参画することにより、児童は日常生活の中で抱えている身近な地域についての思いや願いをとおしてこれらの人材とかかわり、様々な学びを獲得できる。

このように、地域の実態や児童の生活体験に基づいて地域の素材や人材を教材化することは、児童の学習への興味・関心を高め、児童が自らの生活に根ざした学習問題を見出しやすくすることに繋がっている。そして、生活体験を基礎とした学習問題の設定により、児童の学習問題の解決へ向けた取組はより主体的となるのである。

### イ 実物や本物から学ぶ視点

第二次では、児童の興味・関心を生かした項目別グループで調査活動を行うため、学習が個別化し、「塩づくりの歴史」「義士の歴史」「赤穂城や城下町の歴史」の3グループに分かれて学習活動を展開している。第2章で述べたように、課題別に複数の学習展開を用意することは、児童にとって主体的に学習を進めやすい授業プランであるが、学習にかかわる指導者の人数も増えることになる。専門家である学芸員の力を借りることによって児童の学習内容を深めることができるし、地域の人的資源を教材化して活用することで学習支援にかかわる指導者を増やし、児童の調査活動をより充実させることが可能になると考えられる。



図3 グループごとに調査活動を計画

こうした見学や調査などの体験的な活動は、児童にとって楽しく取り組むことができ、学習意欲を高めるものである。しかし、一時的に興味・関心を高めただけでは、十分な学習効果は期待できない。児童が、



学習意欲を持続し、自ら問題を解決していこうとする学習活動に繋げるためには、児童が見通しをもって観察や調査・見学などの体験的な活動に取り組めるよう支援することが必要である。ここでは、ワークシートを活用して調査活動の計画を立てさせ、児童一人一人に時間をとって計画の立て方や調査の方法を助言することにより、児童が見通しをもって調査活動に取り組むことができるよう支援している。その結果、児童全員が「自分で調査ができた」という成功体験と自信をもって発表会に臨むことができたそうである。

また、調べ方や学び方の知識や技能を定着させることは、自ら問題を解決しようとする力の基礎となる。例えば、実際に赤穂の歴史に関する施設を訪ね、そこで働く人たちの思いをインタビューする調査活動では、児童が自信をもって人とかかわりながら学習できるよう人との交流のマナーを事前に確認するという支援を行っている。その結果、児童は授業後の感想に、「たくさんの人に出会えたこと」「インタビューがはずかしくてできなかったけど、一回聞いたらやさしく教えてもらえたので、どんどん聞けるようになったこと」をよかったこととしてあげている。そこには、児童があらかじめ人に対するマナーや、取材のしかたを学んでおくことによって、インタビューという体験的な活動に効果があったことが見て取れる。

#### ウ 互いの考えを深めあう表現活動

第三次では、考えたことを伝え合い、互いの考えを深めるためにポスターセッションを取り入れている。ポスターセッションでは、限られた時間内に自分の調べたことや考えたことを伝えなければならないため、話す内容を整理しておかなければならない。そして、聞き手は自分の知りたい内容を発表しようとしている話し手のところに集まるため、話し手の児童は聞き手にわかりやすいポスターを用意する必要がある。ここでは、調査した内容から取捨選択した情報を効果的にポスターに表現させるために、国語科で学習した見出しの付け方や割り付けの技能を児童に想起させ、活用させている。こ



図4 ポスターセッション後の話し合い

うした具体的な支援の成果が、「発表に自信が付いた」「大きな声で言えるようになった」「たくさんの人に『赤穂の歴史』のことを知ってもらってよかった」といった児童の感想によく表れている。そして、発表するだけでなく互いの考えを深めるためには、発表を聞いている児童への指導も大切である。聞き手の児童には、話の要旨に気を付けて聞くことができるようワークシートを用意し、自分の考えとの相違点や共通点を考えながら聞くことも意識付けている。話し手の意図するところを考えながら聞き、自分の考えと対比して深めていくことが、第四次のこれからのまちづくりを考える学習へと効果的に繋がっている。

第四次では赤穂のまちづくりについて考え、自分がどのようにこれからのまちづくりに関わっていくかを話し合い、発表している。生活体験を基礎とした学習問題の解決に向けて児童が主体的に取り組むよ



図5 これからのまちづくりについて考えたことを発表

う教師が支援した結果であるが、そこには、地域の素材や人材を授業で取り扱うにあたって、児童の実態を見極めた適切な教材化が行われている。例えば、児童は、赤穂市立歴史博物館では、「赤穂の歴史」を守るための努力や工夫が行われていることを知るとともに、施設の方から「あなたたちにも、このまちの歴史を守るために力を貸してほしい」とお願いされたことが、これからの赤穂のまちづくりを考える動機付けとなったそうである。日本の歴史を学習する中に、本単元のような地域の素材や人材を教材化した歴史学習を組み込むことで、児童は新たな視点から地域を見つめ直し、これからのまちづくりに自分の意見をもつとともに、歴史を学ぶ意義を

感じとるのではないかと考える。こうした社会教育施設の職員との出会いも、適切な教材化がなされてこそ、良質な体験的な活動として児童の学習に生かされるのである。

地域の社会教育施設や人材を適切に教材化して児童との出会いの機会を与えていくことは、よりよく社会にかかわっていこうとする児童の公民的資質の基礎を育成するうえで、大きな役割を果たしていくものとする。

## おわりに

本研究においては、当所が実施した「社会科教育実践研修講座」の研修成果である地域の社会教育施設を活用した授業実践例をとおして、体験的な活動とそれに基づく表現活動を充実させる授業の在り方について考察した。

「地域をテーマに単元を組み、地域の人材の教育力を積極的に活用したことにより、学習に具体が登場し、理解が深まった」「体験活動の位置付けとねらいを明確にすることにより、子ども自らが意欲をもって主体的に問題を見付け、自分とのかかわりの中で問題を解決したり、身に付けた力を生きて働く力にしたりすることができた」といった授業研究会記録から、地域の社会教育施設や人材を活用したことが児童の主体的な学びの形成に効果的であったことがうかがえる。地域社会を学習の場ととらえて積極的に社会教育施設や地域の人材を活用した学習活動を展開していくことで、児童生徒が自らの問題意識にしたがって地域の社会教育施設等や様々な人々とかかわり、観察や調査・見学などの体験的な活動を充実させ、主体的な学びを形成していくことが可能になると考えられる。

それぞれの学校を取り巻く地域の実態は多様であるため、まずは、教員が児童生徒の生活している地域の素材や人材を正しく理解することから教材化を始めることが大切である。そして、学習のねらいを効果的に実現するために、地域や学校及び児童生徒の実態、調べたりまとめたりするといった学習活動の特質、他教科との関連などにも留意して、各学校が創意工夫を生かした指導計画を作成していくことが望ましい。

注)

- 1) 文部科学省『小学校学習指導要領』, 2008
- 2) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 社会編』, 2008, p. 102
- 3) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 社会編』, 2008, p. 100
- 4) 文部科学省『小学校学習指導要領』, 2008, p. 13
- 5) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 社会編』, 2008, p. 101
- 6) 文部省『新しい学力観に立つ社会科の授業の工夫』, 1996, p. 16
- 7) 文部省『小学校学習指導要領』, 1989, p. 37
- 8) 『兵庫県立考古博物館学習支援ブック』をもとに筆者が作成した。
- 9) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 社会編』, 2008, p. 100